

マタイの福音書 11 章 28-30 節『わたしの元に来なさい』

丸山 園子 師

「さあ主の家に行こう」と言える根拠となる主の招待を確認したい。

1. イエスさまの招き(28) イエスさまが招いているのは、すべて、だれでも。制限がない呼びかけは、生ける神のみ子、救い主である証拠。「わたしのもとに来なさい」とは、すなわちイエスさまを救い主と認めることへの招きとなる。ここは、イザヤ書のメシア預言と呼応している。招かれているのは、有限な人間であることを認めている人。疲れを覚えるのは、有限な存在であることを自覚して、イエスさまのもとに行けるチャンスとなる。

2. イエスさまのもとにあるもの(29, 30) この休みは、解放。豎琴の弦を緩めること。一番いい状態にするためのプロセス。例は出エジプト。奴隷状態の圧迫から解き放たれて終わりではなく、主の民とされて主の愛と保護のもとに生きることまでが含まれる解放。与えようといわれている休みは、イエスさまが与えてくださる救いを表している。「休み」を言い換えているのが、29 節の「たましいの安らぎ」。たましいは神さまとの関係を意味する。この関係のために、救い主を認めて主の元に行く、に加えて二つのことが命じられている。

・「取りなさい」— 取る「くびき」は、牛と牛の首をつなぐ横木。イエスさまとつながること。イエスさまと共に生きる決断をすること。この「くびき」は私にフィットして快適。一緒に負って歩んでくださる方がいるので重さも半減し、「軽い」。主の家に会いに来て終わりではなく、イエスさまは日々共にいてくださる。

・「学びなさい」— 弟子になること。福音宣教のゴール。師匠が認めてくれている。師匠は一人。そばにいて歩んでくださるイエスさまをよく見て、イエスさまと歩調を合わせて歩んでゆけば、イエスさまに似る者とされていく。倣うべきイエスさまの姿は、「柔和」、「へりくだっている」。これは、イエスさまの受肉の生きざまです。神さまに聞き従う姿勢。この生き方には、たましいの平安が約束されている。問われているのは私たち一人一人の応答。主の日に主の家に行くのは、この信仰告白の確認となる。あなたこそ私の救い主です、と告白して喜び、一番いい状態に調整していただいて、今週も主とともに歩みたい。